

新しいいたのしみ

伽藍堂

毎日変わり映えのしない吊革に掴まりながらの通勤には気が滅入っていたが満員電車の中では特にすることも無く窓の外の景色を眺めるのが習慣となっていた。ただ使い始めて数日の内はともかくこう毎日毎日乗降を繰り返すとそれにも飽きてくるが他に適当な時間潰しも無く相も変わらず窓の外を昨日と同じように眺めていると昨日まで幾度と無く見てきたはずの光景のどこかに違和感を覚える。ある区画を電車が通過するときの景色であるがその場所は一区画続いて高層ビルとまでは呼べずともある程度の高さのビルが建ち並んでいる場所であるがその区画の右端にはビルではなく小さな商店が建っているように見える。昨日まではその景色にはビルが建っていたと記憶しているが今そこには昨日までは見なかった建物が確かにそこにある。妙だなとそう感じたけれども記憶違いかしばらく前に建物が建て変わったけれど意識していなかっただけであろうとその日はそのまま忘れてしまった。

次の日もまだ眠い身体を引きずり乗り込んだ電車で揺られていると昨日感じた違和感を再び、昨日より強く感じた。強まった違和感の原因はなんであろうかと

意識を凝らすと昨日はその区画の右端のビルが小さな商店へと変わっていたが今見るとその隣のビルの建っていたはずの場所に今日は確かに民家が建っている。

昨日違和感を覚え意識して見ていた場所であるので間違いではないはずだ。昨日の今日である。僅か一日でビルが小さな民家へと建て代わっているなどということがあるのであろうか。しかし現にそこにはビルは無く民家が存在するのだ。もしかするとただ疲れているだけかもしれない、そう思うことにしてその日はそのことについて気にはなつたが考えないことにした。

次の日の朝、再び電車に乗ったのだけれどもその場所にさしかかるとひそかに予想していたとおりの景色が眼前に現れる。昨日確かに確認したはずの右端から三軒目のビルが今朝はこれもまた民家へと変わっているのである。二度三度確認したが確かに区画の右から三軒はビルではなくなっている。こうなれば確かに変だ、丁度明日は土曜で休日であるので直接見に行つて見よう、そう思った。

土曜で休日ではあるけれどもいつものように昼過ぎまで眠りこけることはせず平日どおりの時刻に目を覚

まし支度をして家を出る。平日に比べあからさまに乗客数が少なく普段は感じることの無い落ち着いた心持ちで電車に揺られる。本当ならば寝ているはずの時間であり少しこの揺れに眠気を誘われたけれどももうすぐ件の場所を通過するので我慢して吊革に掴まる。もうこのカーブを曲がればあの場所である。そしてやはり予想されたとおりではあるのだけれども右から四軒は民家や商店やつまりはそういったところの建物である。四軒目はどうやら定食屋と相成られた様子であり少し小腹が空くこともあるのでやはり次の駅では降りねばならぬようである。

初めて降りる駅であったが駅に設置された付近の案内板を見るに駅前の大きな通りを道なりに進み三つ目の信号を右に曲がればどうやらあの区画へと辿り着くようである案内を信じ歩くことにする。恐らく十分程歩いただろうかとうとうあの区画の左端のビルが見えてくる。なかなか立派なビルではあるが何か変わったところがあるかと問われるとそのような所は見当たらずまあ言ってみればありふれたビルの内の一つと言っても差し支えは無いのではあるまいかとそう考え

る。それがひいふうみい続くとその先は急に景色が開け晴れた空が目の前に広がる。電車から見たとおり街に幾軒かありそうな個人経営の定食屋である。どうしようかと躊躇したのだけれど少し歩いて腹も減ってきたので暖簾をくぐり店内へと入る。休日の時間も早いせいもあつてか客は年配の男が一人、定食の味噌汁をずずすとすすっているだけで他は見当たらない。空いているテーブルに着くとおかみさんがお茶を持ってくる。しばらく悩んだ後、鯖の塩焼きを頼むこととする。料理が来るまではすることも無く店内を見回すがこれもまた何か変わったところも無くありふれた街の定食屋といった風情である。きよろきよろと辺りを見回しているのと定食が来る。骨を取り鯖を食うと脂がのりとてもうまい。鯖と漬物でご飯を頂き、味噌汁を飲みを繰り返して、平らげる頃には十分な満足を得ていた。腹を満たしたので勘定をする。

「うまい定食でした。ごちそうさまです」  
お世辞ではなく、本当にうまかったのでこれは本心である。

「あら、良かったわ。また来て下さいね」

おかみさんは小銭を数えながら答えてくれた。このまま帰ってはわざわざここに来た意味がうまい鯖の塩焼き定食を食った事だけとなってしまうのでおかみさんに聞いてみることにした。

「この店はいつから？」

聞いてからこんな質問をしても大丈夫だったのかと心配になる。自分の目を信じるならば昨日現れた店である。

「そうねえ。戦争が起こる前にうちのおじいちゃんがつくった店なのよ。戦争で焼けて一回建て直したけれどそれ以来この店も頑張ってるのよ」

これ以上根掘り葉掘り聞くのも野暮であるので店を後にする。一番右隣の商店もあまり変わらない答えである。さすがに民家に立ち入ることはしないが、いずれの家も歴史を感じる佇まいである。結局それ以上の収穫は無く、しばらくその付近をぶらついた後帰路に着く。あの定食屋の鯖はうまかったからまた食いに来るとしよう。

日曜も気になるので見に行こうかと思うのだけれども今日は中学校以来の友人に誘われているためそちらの予定を優先することになっていた。その日は一日遊び

羽目を外した。電車に乗ったけれども違う線で逆方向である。月曜日が早く来ないかと思うのは随分と久しぶりのことであつた。

いつもはしばらく布団に転がっているのであるけれども今朝は目が覚めると早急に支度を済ませ、少し早いぐらいに家を出る。そして満員電車に揺られながら待っていると案の定左端の一つを除いては民家や商店となつている。これは予想できたことだけれどもそれでは明日はどうなるのだろうか後一つである。おかみさんは戦前から建つていると言つていたけれどもそういえば役所の記録はどうなつていのだろうか。氣になつたけれども会社があるので確認しに行くことも出来ない。あきらめて出勤することとしよう。とりあえずは明日どうなるかだ。このことに氣付いているのが自分だけかもしれないと思うとなんだか氣分が良くなり知らずのうち鼻歌を歌つていたようだ。隣のサラリーマンに怪訝そうな顔をされる。その後は小さくなりながら出勤した。

今朝も昨日と同じように起きて支度をして早く家を出る。今日どうなるのかを見届けた後はまた楽しみの

無い苦痛な電車通勤が続く可能性を考えると頭が重くなる。そんな考えは振りほどき駅へと向かう。駅へ着くと改札で人だかりが出来ている。怒号が響き何やら騒然とした雰囲気である。

“現在、交通機関は規制によりご利用いただけません”  
幾度と無く駅員が叫んでいる。

“会社に遅れる”

“どう責任とつてくれるんだ”

“後五分で遅刻だ”

“ちゃんと説明しやがれ”

“遅刻する”

さまざまな声が混じるけれど駅員も状況を把握していない様子で同じことをオウムのように繰り返すだけである。

“現在、交通機関は規制によりご利用いただけません”

“現在、交通機関は規制によりご利用いただけません”

“現在、交通機関は規制によりご利用いただけません”

そんな中、スピーカーのついた車が駅前に乗り付けてくる。そのスピーカーは泣き喚く会社員の声も、悪態をつく学生の声も、喉を哽らした駅員の声も何もかも



聞こえなくなるような大音量でこう叫んだ。

「こちらは政府広報車です。現在隣国であるA国より弾道ミサイルが発射されました。繰り返します。現在隣国であるA国より弾道ミサイル、ミサイルが発射されました。皆さん落ち着いて落ち着いて落ち着いて。

大丈夫です。優秀なるわが国軍の迎撃ミサイルがぎゃつ等のミサイルなどええそうです。そうです。ミサイルなど我が優秀なる我が我が国軍ならば必ずや打ち落とすしてくれます。我が国の軍隊ならば必ず、必ず打ち落とすはずです。そのはずです。皆さん、落ち着いてください。大丈夫です。あなただけじゃなくて私にも、私にだって妻も子も居るんです。そうです。打ち落とされます。本当です。本当なんです。こらそこの奴。おい、何を言ってるんだ。出て来い。おいこら。ミサイルは落ちないんだよ。くだらないことを言っつて皆を惑わせるんじゃない。わが国の領土にミサイルなんぞ落ちない、落ちない、落ちない。いや落ちてたまるか。まだ死にたくないよ。おれだつて死にたかねえよ。だから落ちねえつてんだ。ろこの馬鹿めが。何回言ったら分かるんだこのやろう。

落ちる落ちるつてぎゃあぎゃあ喚くな。泣いて叫んで何とかなるなら俺だつて叫びてえよ。だから何だつてんだよ。だったら今からミサイル落ちない場所まで逃げてみろつてんだ畜生め”

おれは白い光に包まれながら、泣き喚く会社員の声も、悪態をつく学生の声も、喉を哽らした駅員の声もかき消すようなスピーカーの声すらも聞こえなくなるような声をはるか上空彼方から聞いた。

“チツ、連敗かよ。やっぱり内政が弱いのかな、俺。今度はこつちの活版印刷の研究を早めに終わらせて。

いや、待てよ。それよりもこつちの……”

了

# 新しいたのしみ

初出 『混凝土の隙間と奇譚集』 2008年12月30日 発表

2010年5月9日 公開

著者 伽藍堂

編集人 今出川潤

連絡先 [vert@bugyo.tk](mailto:vert@bugyo.tk)

企画・制作 [ver.T](http://ver.T)

<http://vert.bugyo.tk/>

このお話はフィクションです。  
本作品に関する諸権利は著者自身に帰属します。  
転載、引用される場合は著者および出典の表示をお願いします。